

研究課題	GIGA と” ふくし” で開くカンボジアの教室
副題	～つながりながら、作りながら～
キーワード	国際協働、国際連携、探究学習、SDGs、質的研究
学校/団体名	私立学校法人日本福祉大学附属高等学校
所在地	〒470-3233 愛知県知多郡美浜町奥田字中之谷 2-1
ホームページ	https://www.n-fukushi.ac.jp/koukou/

## 1. 研究の背景

探究学習で行う SDGs の学習では、ICT の活用に対する期待が大きい。しかし、遠隔会議システムを活用した講義、調べ学習によるスライド作成・発表するなどの活動にとどまっている。また、国際交流においても、ICT の特長を生かしながら「継続性」をともなうことが期待されているが、「文化を知る、まとめる、発表する」パターン化された活動にとどまり、結果として単発的な取り組みになってしまうことが多い。「双方の学校や教師が、交流内容に対して興味・関心を持ち、実践に対するモチベーションを持たなければ、交流学習は成功しない。そのためには、教師間でしっかりと議論が行われ、実効性の高い学習プランを作成して、継続性の高い交流を目指す必要がある」(成瀬・長山 2006, pp.19-20)。そこで「知を求める ICT」に加え、「継続性をともなう国際協働(交流)」の中で、社会的責任感にもとづき、そしてタスクベースで達成感を得る ICT の活用を視点に加えた学習環境を作り上げたい。本研究では、ロジャー・ハート(2000)のアクション・リサーチを発展させた実践方法に依拠して、学習環境をデザインする。田中(2008)によれば、ハートの実践方法は、子どもが地域を歩いて、具体的な課題を特定し、その課題について探究し、課題解決のための計画を立てて実行に移す、という方法論である。具体的な地域課題を解決していくことで子どもは大人との信頼関係を作り、無力感ではなく効力感を得て、社会問題解決の担い手として成長していくことができると指摘している(田中 2008, p.172)。成人を迎える高校生として、お互いの意見を尊重する姿勢に留意した、「ふつうのくらしのしあわせ」につながる実践に取り組みせたい。具体的な学習環境については、「ICT で現地とつながりながら、教育における課題を特定し、その課題について探究し、課題解決のための計画を立てて実行に移す」として、図1のようにデザインし、次の2つを中心に実践する。

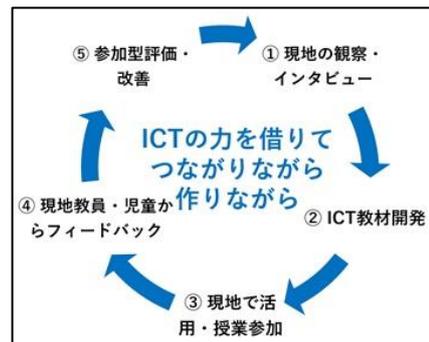


図1 学習環境デザイン

- (1) カンボジアの小学校との連携：国際的つながりを深め、自分事として捉え当事者意識を持って、ニーズを的確に掴む。ICT の活用により現地小学校教員、教室と日常的につながり、インタビューを継続し、個々が責任をもってレスポンスする実践を設計する。
- (2) SDGs のアクション：現地の教材や学習環境の分析後に、現地のニーズに基づき、ICT 学習コンテンツを作成し提供する。オンライン授業参観と生徒主体のワンポイント授業を展開することにより、児童の実態・学習・生活環境を把握する。

学習・交流モデルをカンボジア現地小学校との連携の中で作り上げ、交流プロセスを質的に評価したいと考えた。

## 2. 研究の目的

ロジャー・ハート（2000）の学習方法論の一つの試みとして、「教育格差と ICT（算数）学習コンテンツの作成」をテーマに、カンボジア現地小学校と日常的につながりながら、図 1（学習環境デザイン）に沿って、生徒主体の SDGs 国際連携探究学習を行っていく。

実践を通じて「表情の見える無理のない交流の中で、生徒の意識がどのようにかわるのか」、「ICT」、「SDGs」、「達成感」、「貢献」をキーワードに成長のプロセスを質的に評価する。

## 3. 研究の経過

高校 3 年生グローバル英語コース・文理コース（文系）26 名を対象とした探究学習の授業で、表 1（研究・実践の経過）に沿って取り組んだ。※夏季休暇（7 月）からは、フィリピン提携校の高校 3 年生 4 名も参加し実践した。

表 1 研究・実践の経過

月	取り組みの内容・方法
4	○カンボジア現地教員との打ち合わせ ・年間シラバスの確認 ・生徒作成コンテンツについてイメージ共有
5	○現地観察・オンラインインタビュー ※生徒に自分の想い・感想を英文で作成（以降継続）
6	○ICT 学習コンテンツの作成開始，○大学教員による講義（第 1 回）
7	○提携校と共に国際交流イベントでの発表準備，○大学教員による講義（第 2 回）
8	○国際交流イベントでの（海外提携校と）協働発表 ※本活動について英語プレゼン発表・紹介
9	○コンテンツ現地送付・活用
10	○生徒によるオンライン・ワンポイント授業実施，○本校主催 Global Meetup での中間発表準備
11	○本校主催 Global Meetup において（英語プレゼンにて）活動の紹介・中間発表 ※国外の学校・大学はオンラインで参加、※カンボジア現地教員からのフィードバックをもらう
12	○活動の振り返り・生徒自己評価 ※貢献度・評価とまとめの形式は生徒が選択。自分の選んだメディアで“声”を発する。その後クラスで相互評価する。
1	※質問表調査（アンケート）やインタビューをもとに生徒の変容を質的に評価
2	○研究成果報告書の作成

### 【評価・分析方法】

西村・中島（2022）での記述式項目における、KH Coder（樋口 2020）を用いた計量テキスト分析を参考にして、質問表調査（アンケート）やインタビューをもとに、生徒の成長のプロセス（「達成感」、「当事者意識」、「貢献度」、「学習効果」）を質的に評価する。

## 4. 代表的な実践

「教育格差と ICT（算数）学習コンテンツの作成」をテーマに、カンボジア現地小学校と日常的につながりながら、図 1（学習環境デザイン）に沿って実践した。単に楽しいイベント、単発的な交流でおわらせるのではなく、お互いの「教育の質の改善・豊かな学び」の機会となるように、表情の見える無理のない交流の中、国際連携力を高め相互互恵の関係を築き、継続的な実践につながるよう留意した。

### 4.1 現地とつながる【気づき】

本来であれば現地に赴き、どのような状態で学習をしているのかを肌で感じることができる。しかし、今は ICT の持つ「アクセシビリティ」を生かしていくことが必要である。ICT を活用することで「距離」と「時間」の制約を越え、様々な現地小学校を継続的に授業参加・参観する

ことが可能になる。この多様性と継続性のある活動の中で得られる「気づき」は多く、このことは「常に変化する世界をよく理解する」姿勢を生み出す。本実践では Zoom を通じてカンボジア現地小学校の授業参加・参観を実施した（図 2）。生徒感想文「現地との交流を通じて【気づき】（記述式）」を、KH Coder を用いて計量テキスト分析したところ、図 3 で示す共起ネットワークが得られた。生徒たちの「気づき」は、大きく 11 テーマに分類される。「④生徒数が多い」、「⑧教員不足」、「⑨就学率の低さ」、「⑪自分達の年齢に近い小学生がいる」等、生徒たちの気づきの中に「教育における課題を特定する」ことにつながっていることが確認できる。また、「①日本とカンボジアの比較」の因子において、相手を尊重し、自分を見つめ、世界のなかで活動しようとする意識が見て取れる。



図 2 オンライン授業参観の様子

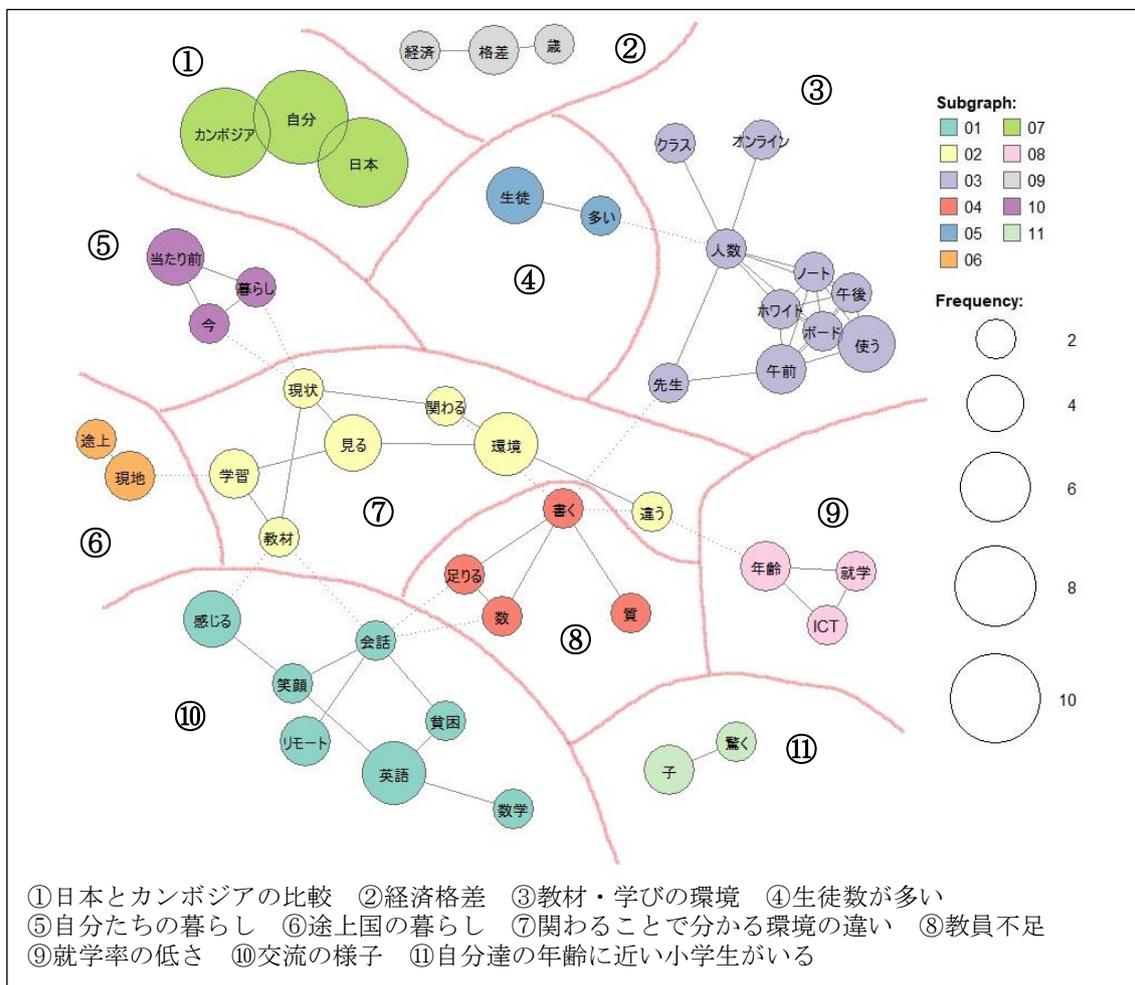


図 3 現地との交流を通じて「気づき」(記述式)に対する共起ネットワーク

#### 4.2 現地教員とのオンラインインタビュー【深める】

現地観察（授業参加・参観）後は、現地教員へのインタビューを行う。生徒達はインタビューを通じて、自らの「気づき」について確認・共有しながら、両国の特徴・特長について理解を深める。この行為を通じて現地のニーズを的確に掴み、「一方的な押し付け」ではない、相手（日本）の特徴と日本（相手）の特長を生かした「良いもの」を共有していこうという意識が芽生え

る。「言葉を理解できないと、交流に対して非常に消極的になりがちなので、教師のサポートの在り方を研究する必要がある」(鶴狩・辻・園屋 2003, p.155)と指摘している。生徒たちがインタビューに対して消極的にならないように、英語や日本語を使い、大人がサポートしながら、まずは時間を増やし経験知を積みながら慣れさせていくことに留意が必要である。

#### 4.3 ICTだけに頼らない多様な交流【深める】

本実践では、ZoomによるICTを中心とした交流だけでなく、現地に渡航する人に(ファシリテータとして)協力を得ながら、英文による手書きの手紙による交流も実施した。「ICTだけに偏らない交流を大切にしていきたい。例えば、手紙や実物を送り合うなどの工夫をすることで、交流がより充実したものになる」(鶴狩・辻・園屋 2003, p.155)と指摘している。現地児童の様子から、「内容を分きたい」、「英語を活用・発話してみたい」と、児童が英語に対して関心を高め、学習意欲の喚起へとつながった。また、日本側の生徒は手紙(図4)から「同じ学年でも年齢にバラツキがある」等の生きた情報を獲得して、ICT交流だけでは見えにくい、教育格差の現状について認識を深めた。「手作りの物による交流」を取り入れることが、充実した学びや活動に結びついた。

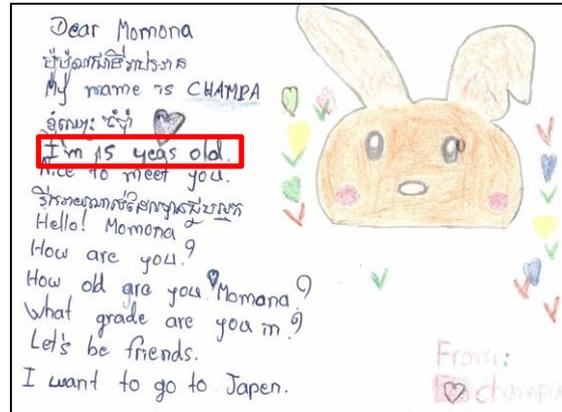


図4 現地児童からの手紙(返事)

#### 4.4 国際交流イベント「Global Meetup 2022」【現地教員のフィードバック・実践の波及】

本校主催の国際交流イベント「Global Meetup2022 (GM2022) : 10月29日」をハイフレックス開催し、日本(高校2校、大学2校)、台湾(高校2校)、カンボジア(現地教員2名)、フィリピン(高校2校、大学3校)が参加した(図5)。GM2022では、各校からSDGsを中心とした諸問題に対する具体的なアクションプランについて発表されるなか、本校からは「カンボジア現地児童に向けたICT学習コンテンツの作成」について報告した。カンボジア現地教員からのフィードバックを通じて、作成したコンテンツ(図6)が現地でどのように活用されているのかを確かめ、教育改善に貢献していることを実感した。生徒の感想文によれば、「世界中の人々が多くの問題や困難に直面しており、彼らを助けることができるのは、私たちが協働することです。人々を勇気づけ、協働することが必要なのです」等の記述があり、アウトプット活動により「当事者意識」が高まっていることが伺える。



図5 Global Meetup 2022

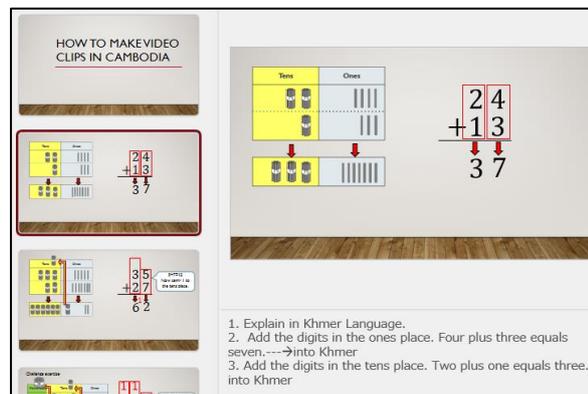


図6 生徒作成 ICT 学習コンテンツ

### 5. 研究の成果

本研究では、「教育格差と ICT（算数）学習コンテンツの作成」をテーマに、継続的な国際協働・交流を目指し、SDGs 国際連携探究学習につながる学習環境をデザインした。多様な交流手段を併用することが、相手を案じ「共感する力」、「当事者意識」を養う上で有効的であった。「共感する力」、「当事者意識」を獲得した生徒ほど達成感は高い傾向にあることが分かった。

#### 5.1 質問表調査からの生徒の変容

本実践を通じた生徒の変容・学びの成果、活動に対する達成感・満足度、社会貢献度を把握するために、実践に関わった生徒 26 名を対象に、Google Forms による質問表調査（アンケート）を実施した。2022 年 12 月 23 日から 2023 年 1 月 11 日を調査（集約）期間とし、回答者数 24 名であった。なお、アンケート項目は、本実践におけるキーワード「ICT」、「SDGs」、「達成感」、「貢献」を反映し、「①本活動に対する達成感」、「②学習効果（成長・変化）」、「③本活動を通じて『国際社会に貢献している』という実感を持つことができた」等の項目を設定した。表 2 は、「②学習効果（成長・変化）」について整理したものである。「国際協働への関心が高まった」、「当事者意識を持ち活動することが出来た」に対する肯定的な回答は 7.5 割を超え、生徒の意識変化が読み取れる。

表 2 生徒質問表調査(アンケート)抜粋「学習効果(成長・変化)」

n=24	ICTの応用力を高めることができた		英語活用能力を高めることができた		数学・算数の専門的な英語表現を養うことができた		ICTコンテンツ作成に対する関心が高まった	
	度数	相対度数	度数	相対度数	度数	相対度数	度数	相対度数
強く思う	8	33.3%	9	37.5%	6	25.0%	8	33.3%
そう思う	9	37.5%	6	25.0%	7	29.2%	10	41.7%
どちらとも言えない	6	25.0%	8	33.3%	8	33.3%	4	16.7%
そう思わない	1	4.2%	0	0.0%	2	8.3%	1	4.2%
まったく思わない	0	0.0%	1	4.2%	1	4.2%	1	4.2%
合計	24	100.0%	24	100.0%	24	100.0%	24	100.0%

n=24	SDGs 4 について知識を養うことができた		途上国の教育環境についてより深く理解することができた		国際協働への関心が高まった		当事者意識を持ち活動することが出来た	
	度数	相対度数	度数	相対度数	度数	相対度数	度数	相対度数
強く思う	10	41.7%	12	50.0%	11	45.8%	9	37.5%
そう思う	9	37.5%	8	33.3%	8	33.3%	9	37.5%
どちらとも言えない	4	16.7%	4	16.7%	4	16.7%	5	20.8%
そう思わない	1	4.2%	0	0.0%	1	4.2%	1	4.2%
まったく思わない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
合計	24	100.0%	24	100.0%	24	100.0%	24	100.0%

#### 5.2 生徒の活動の振り返り「まとめ」の計量テキスト分析

生徒の活動の振り返り「まとめ（記述式）」について、KH Coder を用いて計量

表 3 本活動の達成感

n=24	本活動に対して達成感を持つことができた	
	度数	相対度数
5 (最も肯定的)	8	33.3%
4	12	50.0%
3	2	8.3%
2	2	8.3%
1 (最も否定的)	0	0.0%
合計	24	100.0%

テキスト分析を行った。図 7 は、生徒「まとめ」に記述された語彙の「本活動に対して達成感を持つことができた」との関連を整理した対応分布である（達成感 5 段階：5 最も肯定的→1 最も否定的）。なお、生徒の達成感については表 3 で示す。図 7 右上、「達成度 5」の方向にキーワード「自分」、「手紙」、「分かる」が原点から離れて

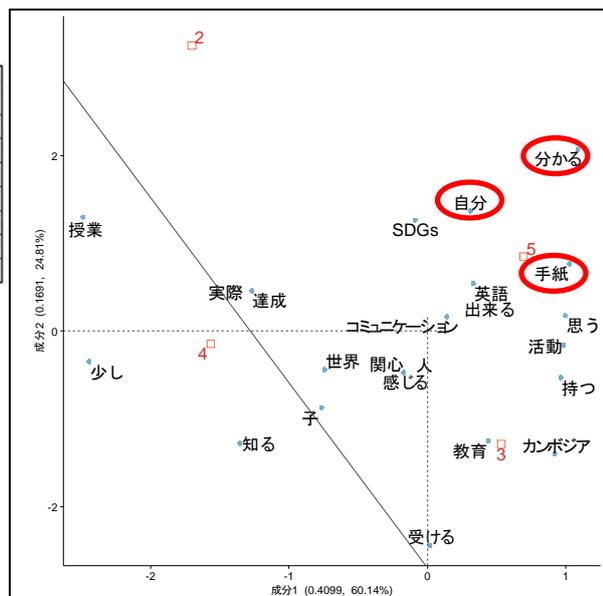


図 7 活動の振り返り「まとめ」に記述された語彙の対応分析の図(最小出現数3)

布置されている。これは、「達成度 5」の記述に特徴的であったことを示している。「自分」、

「手紙」、「分かる」をキーワードとした生徒記述を通じて、次のことが読み取れる。

- ① 「自分」に関連する記述「これからは他人事ではなく、自分自身のこととして認識して、できることをしたいです」、「これからは自分で何ができるか考え、調べ、実際に行動していきたい」等から、当事者意識を獲得することが達成感につながる。
- ② 「分かる」「手紙」に関連する記述「手紙の内容で生徒の年齢の差があることが分かりました。」「日本と比べて教育活動が発達していないことが分かりました。」「リモートだけでなく、手紙でのやり取りをしてより絆を深めることができた。」等から、多様なコミュニケーション・交流手段を活用することが、相手を案じ「共感する力」を育くむ上で有効的であり達成感に好影響をもたらす。

## 6. 今後の課題・展望

本研究では「達成感を得る ICT 活用」に的を絞って、生徒の変容について質的に評価を行った。表 2 からは、学習効果（成長・変化）についても、好影響を与えることが読み取れる。今後は、学習効果にも焦点をあてて、生徒の成長のプロセスについて考察を行いたい。また、日本側の生徒に限らず、本実践におけるカンボジア現地児童への教育的効果についても、定量的研究方法により評価したい。GIGA スクールのコンセプトの一つである「学びの拡大」の視点から、国内他校も含めた「探求」の形も検討し、カンボジア側のネットワークとつなぎ、交流 ICT スキル、交流デザインのモデルを求め、面と面で躍動感ある交流を進めていきたい。

## 7. おわりに

本研究を進めるにあたり、日本福祉大学国際福祉開発学部の先生方には、終始熱心なご指導を頂きました。心から感謝いたします。また、終始温かいご助言を頂いた明星大学教育学部今野貴之准教授にも大変お世話になりました。お礼申し上げます。

※本実践に関わる活動の様子（動画）は下記 URL を参照のこと。

<https://www.n-fukushi.ac.jp/koukou/file/giga-fukushi.pdf>

※ 無断での転用・転載はご遠慮ください。

## 8. 参考文献

- ・ 鵜狩歌織，辻慎一郎，園屋高志（2003）「離島の極小規模校における ICT を利用した国際交流授業の実践とその効果に関する研究」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』13，145-156.
- ・ 田中治彦（2008）『国際協力と開発教育』明石書店.
- ・ 成瀬喜則，長山昌子（2006）「ICT を活用した国際交流学習の効果を高めるための取り組み」『教育情報研究』22(2)，19-27.
- ・ 西村美保，中島忍（2022）「オンライン国際連携学習の試み：日韓協定校間における同時双方向型国際共修」『清泉女子大学紀要』69，105-120.
- ・ 樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して【第 2 版】KH Coder オフィシャルブック』ナカニシヤ出版.
- ・ ロジャー・ハート（2000）『子どもの参画：コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社.